

〔論 文〕

オンライン新聞の言語構造と話しことば性

——「海の怪物」報道に基づく一考察——

細 川 裕 史

「それとも、ドイツ人艦長がのちに語ったように、それは海の怪物だったのだろうか？」
（『ビルト』オンライン版, 2016.10.19）

I はじめに

ドイツ語によるオンライン新聞は1994年に登場し、1997年にはじめての開設ブームが起きた。定期刊行物としての新聞が登場して以来400年のあいだに、新しい媒体が生まれるたびに新聞を紙媒体から別の媒体におき換えようという試みがなされてきたが、電話新聞やラジオ新聞、テレビ新聞などは、結局、普及することはなかった。20世紀末に普及したインターネットは、しかし、旧来の印刷物に代わりうる最初の媒体となったのである。21世紀初頭においては、オンライン新聞は、紙媒体の新聞にとってかわり、衰退する新聞業界を救う「頼みの綱」（Bucher 2006: 210）として注目されている。とりわけ、2007年に始まった世界金融危機は、新聞業界の紙からオンラインへの転換を促進した。すでにFacebookやTwitterなどを通じて無料でニュースを得ることに慣れてきた若者層を中心に、不特定多数の読者に向けて超地域的で時局的なニュースを伝える日刊紙の読者は離れていき、伝統的な紙媒体の新聞の広告収入が減少したため、新聞社がインターネット上に新たな収入源を求めたからである¹⁾。

そのため、現在では、オンライン新聞しか読まない新たな新聞読者層——記事を始めから終わりまで読むのではなく、リンクをクリックしながら複数の記事を渡りあるき、非直線的にテキストを読んでいく読者たち——と彼ら向けに書かれる新聞の言語が関心を集めている²⁾。し

かし、新聞は複数の執筆者による複数のジャンルにまたがる記事から構成されているため、その言語の傾向を明らかにするのは容易ではない。そこで、本論では、パイロット調査として、小規模なサンプルに基づきオンライン新聞の言語を話しことば性の観点から調査することでその特徴を考察し、今後の大規模コーパスを用いた研究の基礎としたい。話しことば性をとりあげる理由は、第2章でふれるように、先行研究においてオンライン・メディアの言語の話しことば的な特徴がしばしば指摘されているからである。サンプルは細川(2018)で扱った「大海蛇」と同類の「海の怪物」報道を、大衆紙および高級紙から抽出した。このテーマを選んだのは、1930年代の報道記事との比較が可能であり、また、このようなセンセーショナルな報道が「大衆化する」（Uhrich 2015: 57）オンライン新聞の特徴のひとつとされているからである³⁾。

II オンライン新聞の発展とその言語的特徴

1. オンライン新聞の発展

オンライン新聞には、紙媒体の新聞記事のデータバンク形式のものからニュースサイトと同様のものまで、さまざまな形式がある。こうした形式の変遷について、Bucher (2006) は以下の3段階に分けている。(1) 紙媒体の新聞をデジタル化したものとして誕生、(2) データバンクから情報およびコミュニケーションのため

のウェブサイトへ発展, (3) ハイブリッド化。

第1期のオンライン新聞は、紙媒体の新聞を補完するためのものであり、印刷物における記事をデータとして保存するデータバンクであった。また、この時期には、コンピューターの処理速度など技術的な問題から、現在のウェブサイトでは当然の双方向性やマルチメディア性、ハイパーテキスト性は有効には活用されていなかった。この当時の典型例はトップページの一画面内に各欄(「今日の話題」や「国内ニュース」など)へのリンクが貼ってあるだけのものである(「欄型」[Bucher 2006: 216])。当時は、オンライン版の利用者が紙媒体の新聞に慣れたしんでいることが前提だったため、このような構成でも許容できた。

しかし、その後、関心のあるテーマの記事を容易に見つけたいと考える読者向けに、オンライン新聞は発展していく。それが、第2期にあたる「インデックス型」(Ebd.: 219)である。このバリエーションではメインコンテンツ以外にもナビゲーションが設けられ、求めているテーマに関する記事を検索することができたため、特定の記事を探している場合にもあるテーマについて漫然と探している場合にも利便性が高かった。検索結果が示されるメインコンテンツは一画面に収まらず、読者は画面をスクロールさせながら、記事の見出しがあたかも目次のように並んでいる中から読みたい記事を探す。この「インデックス型」から発展し、紙媒体の新聞同様の機能的なレイアウトを備えたのが「機能レイアウト型」(Ebd.: 222)である。これは、紙媒体の新聞が、とりわけ19世紀末から、読者が紙面を理解しやすいように発展させてきたレイアウトであり、読者は紙面のどこになが載っているかあらかじめ把握しているため、容易に必要な記事や情報を見つけだすことができる(たとえば、第一面下段中央には「今日の話題」、最終面左下隅には「天気予報」など)。オンライン新聞に典型的なのは「3面レイアウト」で、メインコンテンツ左のサイドバーにグローバルナビゲーション、さらにヘッダーにロゴともうひ

とつのグローバルナビゲーションがつく、というものである。現在のオンライン新聞はより複雑化しており、3面に加えて、メインコンテンツ右に広告、フッターに奥付など、3面以上で構成されている。ただし、すべての読者が第一面から最終面まで同じレイアウトに接する紙媒体の新聞とは違い、オンライン新聞の読者はそれぞれの関心ごとにリンクを使ってさまざまな画面にとんで記事に接する。そのため、「機能レイアウト」は紙媒体のものほど読者に影響を与えることはできない。また、第2期においては、オンライン新聞は情報を一方向的に提供する媒体から、「コミュニケーション・プラットフォーム」(Ebd.: 224)に発展した。現在では、Eメールを投書するためのボタンはもちろん、FacebookやTwitterなどのSNSシェアボタンも記事に設けられている。

第3期は、オンライン新聞のハイブリッド化である。たとえば、デスクトップ・コンピューターの画面だけではなく、きわめて小さな携帯機器の画面でも読まれるようになったため、現在では、記事をより短く見出しをより多くつけるといった工夫がみられる。また、オンライン版ならではの強みを生かし、旧来のテキストによる記事だけでなく、音声や映像によってもニュースが提供されるようになっている⁴⁾。

紙媒体の新聞とオンライン新聞のレイアウトの一例として、今回調査したサンプルを紹介する。図1はイラスト新聞“*Kölnische Illustrierte Zeitung*”(『ケルン絵入り新聞』以下、KIと表記)における1934年の記事、図2はドイツの代表的な大衆紙“*Bild*”(『ビルト』以下、BZと表記)のオンライン版における2016年の記事である⁵⁾。

図1の記事は全面を使った記事であるが、図版を重視したイラスト新聞らしく、潜水艦の艦橋に立つ軍人のかなり大きな写真と同程度の大きさの「海の怪物」の想像図が紙面のほとんどを占め、さらには左下に沈没する船の小さな写真もあるため、テキストの量は少ない。ヘッダーにはページ数と紙名、号数が記されている。右上にここだけローマン体で見出しが書か

Oct. 2022

オンライン新聞の言語構造と話しことば性

れており、なかでも「怪物 (Ungeheuer)」という一語だけは太字で強調されている。本文はフラクトゥーア体で3段組になっており、全部で345語を含む。「怪物」の想像図の下には図版のキャプションがあり、フッターには奥付が載っている。

図2のBZはその名のとおり図版 (Bild) を重視した新聞であるが、この画面では「ミステリー」欄のアイキャッチとリンクが貼られた関連記事(「ナチの潜水艦のそばで古代ザメはなにをしているのか?」)につけられた潜水艦の写真しかみられない。画面をスクロールすると、この記事には唯一、潜水艦の残骸が発見された現場を示す図版が付けられていることが分かる。ヘッダーにはロゴや天気予報、グローバルナビゲーション、「パンくずリスト」などがあり、メインコンテンツ右のサイドバーには広告がある。広告は、メインコンテンツに埋め込まれる形で記事本文の右にもあり、また本文末にもある。赤文字と太文字を用いた見出しの下には、



図1 紙媒体の新聞のレイアウト例

Eメールの投書ボタンやSNSシェアボタンなどがあり、執筆者名と記事の掲載日時のと、ようやく本文が始まる。本文も太文字を駆使して重要な箇所を見つけやすく工夫している。しかし、とりわけ目につくのは、本文が始まってすぐに同じテーマ(「潜水艦」)を扱った別の記事へのリンクが貼られていることである。そのこともあって、画面をスクロールさせないかぎりは、引用部を含めてもたった230語しかない本文を概観することはできない(図2で示されているのは185語)。画面をスクロールすると、「こちら興味深い (Auch interessant)」という広告欄によって本文が中断されており⁶⁾、その後、前述の図版につづいてようやく本文の終結部が現れる。文末には他の(映像も含む)記事や広告へのリンク、さらには比較的大きな広告がある。フッターにはヘッダーよりも詳細なグローバルナビゲーションがあり、その下に奥付とモバイル版への変更ボタンがある。ハイパーテキストに関して言えば、「再生可能エネル



図2 オンライン新聞のレイアウト例

ギー」と「海の怪物」の2語にだけリンクが貼ってあった。

BZは、Bucher (2006) のいう「コミュニケーション・プラットフォーム」でありハイブリッド化したオンライン新聞である。たしかに、奥付に示された住所に手紙を郵送するか電話をかけることでしか新聞の作り手とコンタクトがとれなかったKIに比べると、ボタンをクリックするだけで新聞記事をシェアしたり記者に対して意見を述べられたりするBZは双方向的である。また、ハイパーリンクを利用して関心のあるテーマの別の記事にもワンクリックで到達できる。しかし、単純にこの記事を読みたい場合には、広告やリンクによって本文が寸断されており、とても読みづらく感じる。この点では、一目で記事の構成が把握でき、テキストの最初から最後までほぼ中断なく読みとおせるKIの方が優れていると言わざるをえない。

2. オンライン新聞の言語的特徴

オンライン新聞は紙媒体の新聞のデータベースとして登場し、独自のメディアとして発展をはじめてからも、その言語は紙媒体の言語の慣習を引き継いでいた。しかし、その後は、もっぱらオンラインでのみニュースに接する読者層にも対応していくことになる。2000年ごろにはすでに、インターネットの強みを利用し、図版やハイパーリンクを多用するなどオンライン新聞独自の文体が登場するようになっていた⁷⁾。ここでは、オンライン・メディアの言語の特徴について、ドイツ語圏ではどのように論じられてきたのかを、話しことば性と関連づけながら考察していく。

Bucher (1999) は、オンライン新聞が紙媒体の新聞の言語から離れはじめた時期に書かれた論文で、そこではオンライン新聞の発展に有用なインターネットの言語の特徴として以下の5点があげられている。(1) マルチメディア性。記事は、文字だけでなく、音声、視覚的情報(図版、映像)によっても構成される。(2) 双方向性。Eメールによる投書やチャット、オンライ

ン投票など、双方向的な機能が備わっている。(3) 時局性。とりわけ報道に関してはその時局性が重視され、常に内容が更新されている。(4) ユビキタス性。どこにあっても常に最新の情報にアクセスできる。(5) 非直線性。読者がテキストを読む順番というものが存在せず、どのテキストをどの順番で読むのか、読者自身が決定する。この「非直線性」に関しては、新聞は記事ごとの見出しが整備された19世紀末から選択的に読まれる傾向にあり、オンラインならではの特徴というわけではない。しかし、ハイパーリンクの普及により、その傾向が決定的になった⁸⁾。話しことば性との関連が指摘できるのは、マルチメディア性(視聴覚資料により対面コミュニケーション時のような直示表現も可能になる)と双方向性(チャットにおける文字による会話)、時局性(執筆・編集にさいする時間的な近さ)である。ただし、今回の調査に関していえば、調査対象となった資料には対面コミュニケーションを模した資料は添付されておらず、また、記事そのもののみを調査したため、時局性のみが関係している。

また、同時期に「いかにしてオンラインの文章を読ませるか」という視点から論じたStorrer (2001) は、オンライン・メディアならではの可能性として、以下の4点をキーワードとしてあげている。(1) ハイパーテキスト。ハイパーリンクでそれぞれの記事をつなぐことで、関心も知識量も違う読者がみずからの要求にそって読んでいくことができる。このキーワードはBucher (1999) の「非直線性」と重なる。(2) 双方向性。オンラインでは読者が受動的に記事に接するのではなく、リンクをクリックしたり検索エンジンで検索したりすることで能動的に記事に接する。(3) マルチメディア。文字と図版しか使用できなかった紙媒体とは違い、オンラインでは視聴覚資料も同時に利用できる。(4) コンピューターを用いるコミュニケーション。インターネットによってニュースとコミュニケーション(Eメールによる投書やチャットなど)を一体化させることができる。このキー

ワードはBucher (1999) の「双方向性」と重なる⁹⁾。マルチメディアやコンピューターを用いた双方向的なコミュニケーションは話しことば的な要素であるが、上述のとおり、今回の調査とは無関係である。その一方で、より興味深いのは、同論文において、オンライン新聞の読者は「スキニング(検索読み)」するため、そうした読み方に合わせて執筆すべきだ、と指摘されていることである。これは、「現在必要としている情報にとって重要な、中心的内容やキーワードを文中から捜しだす」(Storror 2001: 181) 読み方のことであり、一語一語順に読んでいく一般的な読み方とは異なる。もちろん、こうした読み方が好まれる理由としては、図2で示したように、紙媒体の新聞とは違いオンライン新聞では(短報の類は除き)画面上に記事全体が表示されないため、テキストの全体像をつかむことが難しいという点があげられる。読者は、全体像のつかめない記事を、最初から順に最後まで読もうとは思わないのである。「スキニング」しやすくするために、記事構成の観点からは、図版や映像を多用して記事を視覚化したり、見出しを多用してテキストのどこにどのような情報があるかを明確にしたりすることが求められる。また、言語そのものに関しては、「装飾を排した短文が推奨される」(Ebd.)。新聞は紙媒体しかなかった時代からこのような読み方をされる傾向があり、ジャーナリストにも簡潔で短い文で分かりやすく書くことが求められていた。しかし、オンライン新聞には、上記の理由から、紙のものよりもより一層そのような書き方が求められているのである。そして、この短文化は、話しことば的な特徴である¹⁰⁾。

一方、Uhrich (2015) は、オンライン・メディアを中心としたインターネットの言語の傾向として、以下の6点をあげている。(1) 話しことば的な表現を好む。これは、「インターネットにおける言語のもっとも際立った特徴のひとつ」(Uhrich 2015: 54) とされている。もっとも、この傾向は、チャットやインターネット掲示板、

SNSなど、双方向的なコミュニケーションに顕著にみられるものであり、企業のウェブサイトなどには当てはまらない。(2) 短文化。この傾向はインターネットの登場以前、数百年間継続してみられる傾向であるが、1990年代なかばごろから、百数十文字しか書けないショート・メッセージ・サービスに対応するため、また現在ではTwitterなどへ書き込むために、ハイパーリンクを用いて文中の情報量を減らしたり略記を多用したりすることで、短文化の傾向がとくに顕著になっている。(3) ハイパーテキストを好む。ハイパーリンクを用いて各文章を結びつける書き方が普及したことで、読者は、テキストを始まりから終わりへと直線的に読むのではなく、それぞれの関心に合わせて読む箇所を選択しながら読むようになった。(4) 検索エンジンに向けた書き方を好む。オンライン・メディアでは、インターネット上に公開したテキストが検索エンジンにヒットしやすいように、文中で検索されやすいキーワードを繰り返す傾向がみられる。同時に、複合語や専門用語、キーワードの言い換えなどが避けられる。(5) 大衆化。オンライン・メディアでは、一般に、読者の注意をひくために大衆紙に似た手法が好まれる。たとえば、トップページに大勢の関心を引きそうなテーマ(スキャンダル、セックス、流血ぎた)を載せ、大判の写真とともに刺激的な語彙を含んだ見出しをつける、など。(6) 文体の貧困化。インターネット上では、動画やSNSなど他のメディアと結びついたマルチメディア的な記事の執筆が可能であるにもかかわらず、そうした記事は少数派であり、オンライン・メディアでは旧来の報道文の文体が中心である。これは、記者が書き送ってきたテキストをほぼそのまま掲載しているからだ、編集の労力が少ないというだけでなく、簡潔であるため多くの読者にとって理解しやすい、という利点もある¹¹⁾。新聞ではなくチャットなどを想定したものであるが、オンラインでは話しことば的な表現を好む傾向が指摘されており、また短文化や言語の大衆化などUhrich (2015) が指摘

したその他の傾向のいくつかも話しことば的な特徴である。

Ⅲ オンライン新聞の話しことば性

1. コーパス

本論では、オンラインでは話しことば的な特徴が好まれること、オンライン新聞には「スキヤニング」が可能な短く簡潔な文章が求められていることに注目し、おもに Ágel/Hennig (2006) に基づきながら、実際の記事で用いられている言語の統語構造における話しことば性を調査する。オンライン新聞のサンプルとしては、ドイツの代表的な大衆紙BZと、BZと同じアクセル・シュプリングナー社の高級紙“*Die Welt*” (『デイ・ヴェルト』以下、WEと表記)、そして代表的な高級紙“*Süddeutsche Zeitung*” (『南ドイツ新聞』以下、SZと表記)における同一テーマの記事を選んだ(第一次世界大戦期の潜水艦の残骸発見とその潜水艦にまつわる都市伝説)。大衆紙と高級紙を選んだのは、大衆紙の方が話しことば的な特徴が多くみられ、高級紙の方にはみられないのではないかと考えられたからである。また、比較対象としては、これらの新聞記事と同一のニュースを扱ったふたつのウェブサイト、“*Bundeswehr-Journal*” (『国防軍ジャーナル』以下、BWと表記)および“*Deutsches U-Boot-Museum*” (『ドイツ潜水艦博物館』以下、UMと表記)における記事と、上述のKIにおける記事を調査した。それぞれの記事のタイトルとサンプルの大きさは以下のとおりである。

- a) BZ: “Kriegsschiff SM UB-85 vor Schottland entdeckt. Hat ein Seeungeheuer das deutsche U-Boot versenkt?” (「スコットランド沖で軍艦SM UB85発見。このドイツの潜水艦は海の怪物に沈められたのか?」, 2016.10.19, 187語)
- b) WE: “Fund von deutschem U-Boot

beflügelt Seemonster-Fantasien” (「ドイツの潜水艦が発見され海の怪物に関するファンタジーが広まる」, 2016.10.20, 248語)

- c) SZ: “Legenden um woben es Weltkriegs-U-Boot entdeckt” (「伝説に包まれた世界大戦期の潜水艦発見」, 2016.10.20, 371語)
- d) BW: “Seemonster und Uboote: Was weiß die Bundesregierung? (「海の怪物と潜水艦：連邦政府はなにを知っているのか?」, 537語)
- e) UM: “U-Boot-Wrack aus dem 1. Weltkrieg im Nordkanal entdeckt” (「第一次世界大戦期の潜水艦の残骸、北の海峡で発見」, 1,085語)
- f) KI: “Ein deutscher U-Boot-Kommandant sah schon 1915 das Ungeheuer. Der sensationelle Bericht des Korvettenkapitäns Frhrn. v. Forstner” (「ドイツの潜水艦艦長は1915年すでに怪物を目撃していた。海軍少佐フォルストナー男爵によるセンセーショナルな報告」, 1934.2.10, 152頁, 345語)

なお、サンプルには、執筆者名や公開日時、見出し、図版および図版のキャプション、直接引用文、本文とは別に配置されたリード文は含んでいない¹²⁾。

2. 文の長さ

上述のとおり、現代のドイツ語は一般的に短文化の傾向を示しており、また、オンライン新聞の言語にはとくに「スキヤニング」に向けた記事を書くために短文が求められている。実際に、Uhrich (2015) では、1999年と2009年のオンライン新聞の言語を比較し、短文化の傾向を確認している。本論では、先行研究を参考に一文の平均的長さと短文および長文の割合というふたつの観点から、短文化について調査

した。なお、本論では、Admoni (1987) のいう“Ganzsatz”，すなわちピリオド（またはピリオドに相当する記号）からピリオドまでのひとまとまりを「文」とし、主文や副文といった「文」を構成するまとまりである“Elementarsatz”を「基礎文」と呼ぶ。一文の長さは、「文」に含まれる語数で測っている¹³⁾。

2. 1. 一文の平均的長さ

一文の平均的な長さを表1に示した（表中の“FAZ”は『フランクフルト一般新聞』の略）。なお、オンライン新聞3紙の標準偏差は、BZで9、WEで4.8、SZで6.5であった。一文の平均的長さは、3紙とも約14語であり、大衆紙か高級紙かの違いに影響はみられない。一方で、ウェブサイトに関しては、BWは時代も媒体も違うKIに近く（約18語）、オンライン新聞よりやや長い程度だが、記事全体の分量が多いUMでは極端に長く（約27語）、両者に共通性はみられない。

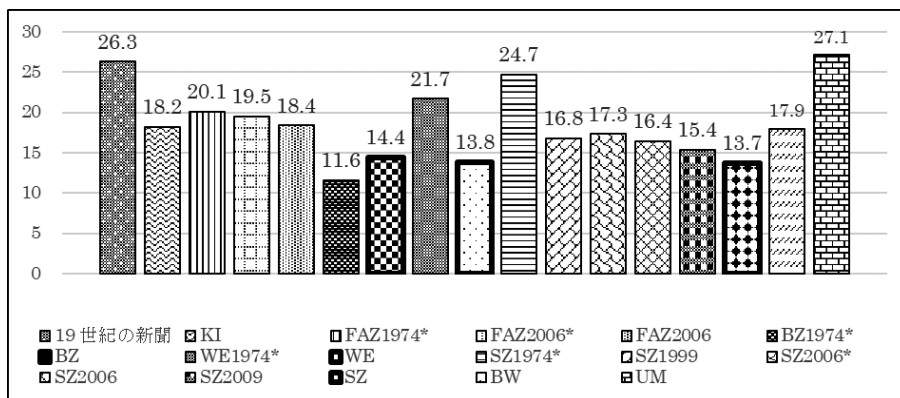
例1はBZの平均的な長さである14語を含む文、例2はUMにおいて平均的な27語を含む文である。ともにふたつの基礎文から構成されているが、この2例だけを見ても、文の長さが「スキミング」のしやすさに大きく影響を与えていることが分かるだろう。文が長ければ当然そこに含まれる情報量が増えるため、求めている情報を迅速に見つけだそうとする読み手には不

向きである。

- 1) Es ist nicht klar, wer das deutsche U-Boot „SM UB-85“ im Ersten Weltkrieg versenkte. (BZ 何者が第一次世界大戦中にドイツの潜水艦“SM UB85”を沈めたのか、明らかになっていない)
- 2) Die Aussagen der Besatzungsmitglieder von UB 85 beschreiben die angreifenden britischen Schiffe eindeutig als Fischkutter, ein Irrtum ist bei dem Größenunterschied zwischen Drifter und Sloop nahezu ausgeschlossen. (UM UB85乗組員の証言によれば攻撃をしかけた英国船は明らかに漁業用帆船[Qシップ]であり、大きさの異なる流し網漁船とスloop [小型の軍艦]とを間違えることは、ほぼありえない)

平均的な文の長さが20語を越えることが多かった1970年代の新聞と比較した場合ほど明確ではないが、2000年代のオンライン新聞と比較しても、今回調査した3紙では一文が短く、Uhrich (2015) が指摘した短文化の傾向が継続していることを示している。ただし、BZに限定してみると、極端に低かったPfeil (1977) の数

表1 一文の平均長さ¹⁴⁾



値(約12語)よりもやや上がっている。この点については、今回サンプルに選んだ記事が、スコットランドからもたらされた情報に、第一次世界大戦時の記述を交えて書かれたものであることが、影響していると考えられる。標準偏差の大きさが示しているように、この記事では文の長さにはばらつきがあり、後述するように、短い文も多用する一方で、情報源であるテキストを要約し紹介するさいには比較的長い文も用いているのである。

2. 2. 短文および長文の割合

文の長さについてより詳細に考察するため、短文および長文が全体に占める割合をそれぞれ算出した。短文に関しては、先行研究の豊富さを重視し、Eggers (1973) にしたがって一文に含まれる語数が8語以内の文を短文とした。一方、Eggers (1973) の基準では短文が求められるオンライン新聞に適した長文が扱えないため、オンライン新聞を分析したFischer (2007)

にしたがい20語以上を含む文を長文とした¹⁵⁾。例3と例4は、それぞれ短文(8語)と長文(20語)の例である。

- 3) Es ist eines der größten Rätsel der Seefahrtsgeschichte. (BZ これは航海史上最大の謎のひとつである)
- 4) Innes McCartney, Historiker und Meeresarchäologe an der Bournemouth University, denkt, dass es sich auch um das Schwesterschiff UB-22 handeln könnte. (WE ボーンマス大学の歴史学者および海洋考古学者であるイネス・マッカートニーは、それは姉妹艦のUB22かもしれないと考えている)

短文が全体に占める割合を表2に示した。平均的な長さではほぼ差異がなかった3紙だが、この観点からは明確な違いがみられた。オンラ

表2 短文の割合 (%) ¹⁶⁾

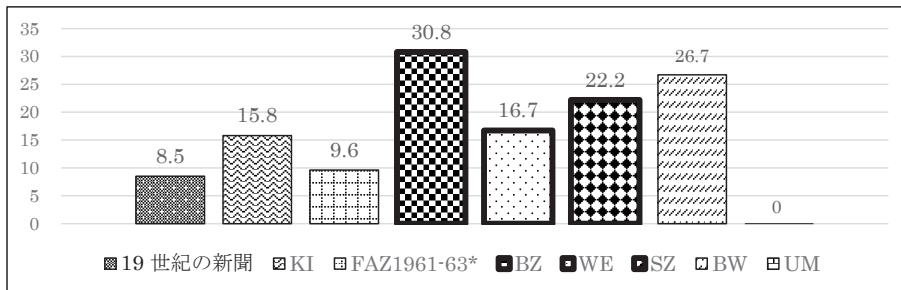
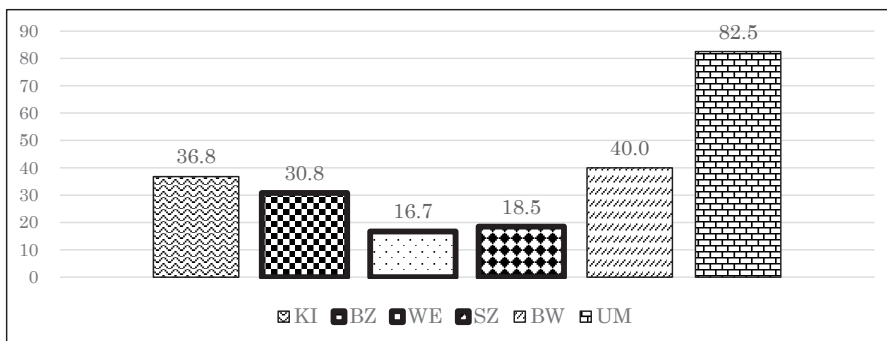


表3 長文の割合 (%)



イン新聞に関しては、話しことば性が高いと思われる大衆紙BZが突出しており、全体の30%以上を短文が占めている。その一方で、高級紙WEでは20%以下であり、80年以上も古い新聞であるKIとほぼ同程度しか短文を用いていない。ただし、このWEにおける割合も、10%に満たない19世紀の新聞や1960年代のFAZに比べれば、高いことが分かる。平均的な文の長さと同様に、ウェブサイトは両極端であり、BWにはSZよりも多く短文が用いられているが、UMには短文がみられない。

しかし、表3に示したとおり、長文の割合をみると、3紙のなかでは短文を多用しているBZが30%以上と長文も多用しており、その一方で、高級紙であるWEとSZはともに20%以下と明確に長文を避けていた。つまり、大衆紙の言語の方が話しことば的で長文よりも短文を好み、高級紙はその逆、とは言い切れないのである。また、ウェブサイトはオンライン新聞よりも長文を好む傾向がみられ、一文の長さが極端に長かったUMは当然としても、BWでも比較的長文が用いられており、40%とKIよりもやや多いという結果になっている。

短文も長文も多用しているBZを例に、それぞれの特徴をみてみると、短文は例3のような単一文だけでなくより複雑な複合文でもみられ(例5, 8語)、また、まれに話しことば的な双方向的コミュニケーションを模した修辞疑問文にも用いられている(例6, 5語)。一方、長文は、もっぱら先行するテキストの内容(例7, 23語)やニュースの背景情報(例8, 35語)を一文中に詰め込んだケースである。

- 5) Klar ist hingegen, wer das Wrack nun entdeckte: (BZ その一方で、誰が残骸を発見したのかは明らかである)
- 6) War es ein britisches Kriegsschiff? (BZ それはイギリスの軍艦だったのだろうか?)
- 7) Beim Kampf mit dem „Untier“ sei die

vordere Deckbeplattung beschädigt worden; nur deshalb hätten die Engländer das deutsche U-Boot an der Wasseroberfläche erwischt. (BZ 艦首側の甲板が「怪物」との戦闘において損傷したらしく、そのため、イギリス人たちはこのドイツの潜水艦を海上で鹵獲したらしい)

- 8) Bei der Verlegung eines 385 Kilometer langen Hochseekabels, das erneuerbare Energie von Schottland nach England und Wales transportieren soll, hatten Arbeiter das 45 Meter lange, gut erhaltene Wrack vor der Küste der Stadt Stranraer entdeckt. (BZ スコットランドからイングランドとウェールズに再生可能エネルギーを輸送するための385キロにおよぶ外洋ケーブルの敷設時に、作業員たちは、ストランラー市の沖合で45メートルの保存状態の良い残骸を発見した)

Admoni (1990) が指摘しているように、先行するテキストを要約した新聞記事では、一文が長くなる傾向がみられる¹⁷⁾。BZの記者は、本来であればオンライン新聞の記者らしく短文を好んでいたのかもしれない。しかし、この記事に関しては、第一次世界大戦中の出来事について潜水艦の艦長が語ったとされること、そして、エジンバラからもたらされた海底ケーブル敷設と潜水艦発見のニュースを、自分のことばにおき換えて新たに短い文にするのではなく、それぞれのテキストを一文に圧縮して伝えようとしたために、このように短文と長文とが入り混じることになった、とも考えられる。

いずれにせよ、調査したオンライン新聞にみられる長文は、それらを構成する基礎文の数が少ないため、読みづらさを感じるほど複雑な構造とは思われない。3紙でもっとも長い文における基礎文の数は、BZでは2(例8)、WEでは

2 (例9)¹⁸⁾, SZでは3 (例10) しかない。基礎文については、基礎文の割合および「文構造の線状性」との関連で再度考察する。

- 9) Der Historiker Wilhelm Knöβ vom Deutschen Marinemuseum in Wilhelmshaven bestätigte, dass es sich theoretisch um das U-Boot SM UB-85 handeln könnte. (WE ヴィルヘルムスハーフェンにあるドイツ海軍博物館の歴史家ヴィルヘルム・クネースは、理論上、それが潜水艦SM UB85かもしれないことを認めている)
- 10) UB-85 war durch den Kampf aber so stark beschädigt, dass der Crew nichts anderes übrig blieb, als an der Oberfläche auf Rettung zu warten, im schlimmsten Fall eben durch den Feind. (SZ しかし、UB85はその戦闘によってひどく損傷したため、クルーには、最悪の場合には敵の手によってであっても助けられることを、海上で待つ以外に選択肢はなかったのである)

3. 文構造の複雑さ

文構造の複雑さに関しては、まず Eggers (1973) に基づいて文タイプを考察し、つぎに基礎文を Ágel/Hennig (2006) の基準を用いて考察した。Ágel/Hennig (2006) は、基礎文をより一般的な主文と副文ではなく、自立的な基礎文 (Elementarsatz₁, 直接法による主文) と従属的な基礎文 (Elementarsatz_x, 副文および接続法による主文, 不定詞句) に分けて考察しており、彼ら以外の先行研究とは比較が難しいが、後述するように、この基準の方がより精密に文構造の複雑さが測れる¹⁹⁾。

3. 1. 文相当句

文相当句は、Eggers (1973) によれば、「文法的に不完全に形作られた発話」(Eggers 1973:

41) である。本論では、基礎文をひとつも含まない文を、文相当句として算出した。この文タイプには、話しことば的なものも書きことば的なものも含まれている。書きことば的なメディアである新聞にはもともと文相当句が少ないのであるが、先行研究によれば、例外的にBZでは多用されていた²⁰⁾。しかし、今回の調査ではBZも含めてほぼ用例がみられない。3紙のなかで唯一の例はSZにおける例11であり、そのほかにはウェブサイトにも紙媒体の新聞にもみられなかった。

- 11) Seiner Meinung nach viel wahrscheinlicher: (SZ 彼の考えによればより真実味があるのは)

この文相当句には、“Die Besatzung des U-Bootes habe, als sie die Briten kommen sah, blitzschnell versucht, wieder abzutauchen.” (SZ イギリス人たちが近づいてきたとき、潜水艦の乗組員は再び潜航しようと急いで試みたのだろう) という文がつづく。つまり、例11は、引用文の導入として用いられているのである。書き手は、この後続する文全体をdass文にして、例11と合わせて一文にまとめることも可能だったわけだが、おそらく、そうすることで一文中の基礎文が増えすぎることを避けたかったのだろう。というのも、今回調査したサンプルでは一文中に基礎文が3以上あるケースはきわめてまれであるが、この後続する文にはすでに自立的な基礎文がひとつと従属的な基礎文がふたつ含まれているからである。BZの言語を考察したMittelberg (1967) は、こうした導入の仕方を「ぞんざいな書き方」(Mittelberg 1967: 184) と呼び、BZには「このような文の断片が無頓着にちりばめられている」(Ebd.) と否定的に述べている²¹⁾。たった一例だけではあるが、高級紙の記者がそのような書き方をしてまで複雑な文構造を避けていると考えると、とりわけ興味深い用例である。

3. 2. 単一文

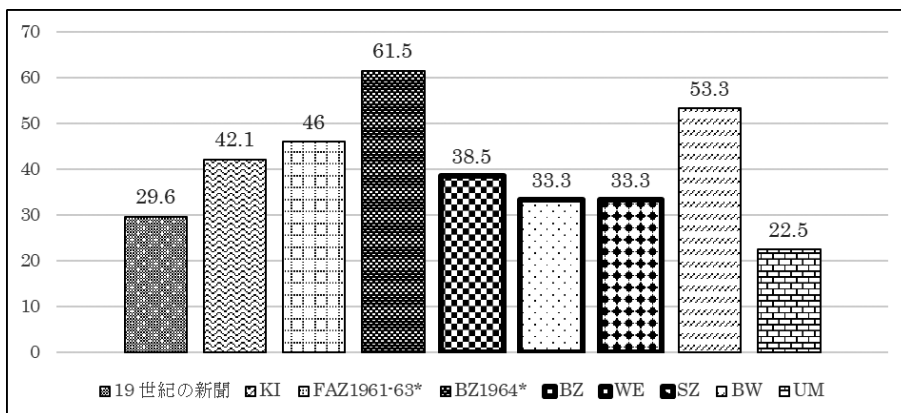
文構造の複雑さを考察するさい、先行研究ではしばしば、主文ひとつで構成されたもっとも単純な構造である単一文がテキスト全体に占める割合がとりあげられてきた。単一文が多く使用されればされるほど、テキストは並列的で話しことば的になる。本論では、自立的な基礎文ひとつだけで構成された文を単一文として算出した。したがって、接続法が用いられた主文ひとつで構成された文は単一文として扱っていない。また、単一文に属するかどうかは基礎文の数次第であるため、同じ単一文であっても短くて理解しやすいものもあれば(例12, 5語)、詰め込まれた情報量が多く長くて理解しづらいものもある(例13, 31語)。

- 12) Der Kommandant der Deutschen behauptete: (BZ そのドイツ人たちの指揮官は主張した)
- 13) Bei Arbeiten für die Verlegung der unterseeischen Hochspannungsleitung Western Link ist das britische Unternehmen Scottish Power in der Irischen See auf das Wrack eines deutschen U-Bootes aus dem ersten Weltkrieg gestoßen. (UM ウェスタン・リンク海底高圧ケーブルの敷設作業にさい

し、イギリスの企業スコティッシュ・パワーは、アイリッシュ海において第一次世界大戦期のドイツの潜水艦にくわした)

単一文が文全体に占める割合を表4に示した。オンライン新聞に関しては、大衆紙であるBZが高級紙2紙より5%ほど多いが、おおむね3紙ともに同程度の割合を単一文が占めているといえる。1930年代の新聞であるKIはこれらよりもやや多く、ウェブサイトに関しては短文を好むBWでは新聞よりも明らかに多い一方で、長文を好むUMではその逆という結果が出た。1960年代の新聞を対象とした先行研究は接続法を用いた主文のみの文も単一文に算入しているため、今回の調査結果よりも高い数値が出ていると考えられ、単純な比較はできない。この点で、Ágel/Hennig (2006)における基礎文の区分にこだわらず、他の先行研究に合わせて主文ひとつのみの文すべてを単一文とみなせばよいと考えることもできるだろう。しかし、筆者の考えによれば、接続法で書かれる主文には他の文の存在を前提にし、それに依存したものがあるため、自立的な基礎文のみの単一文と同一視することはできない。たとえば、以下の2例の下線部は主文ひとつからなる文であるが、先行する一文に依存している。

表4 単一文の割合 (%) ²²⁾



- 14) Der Kommandant der Deutschen behauptete: [...] Das Ungeheuer habe „glitzernde Augen, einen schwierigen Kopf und Fangarme“ gehabt. (BZ ドイツ人たちの指揮官は主張した。[...] その怪物は「光る目とコブのある頭, 触手」を持っていた, と [下線は筆者。以下同様])
- 15) Der Kommandant von U 28, Kptlt. Georg-Günther Freiherr von Forstner, hätte nach einer Legende im Jahre 1933 ausgesagt, [...]. Bei der Kreatur hätte es sich um ein ca. 20 m langes Salzwasserkrokodil mit vier Beinen, spitz zulaufendem Kopf und einem langen Schwanz gehandelt. (UM 伝説によれば, U28の艦長である海軍大尉ゲオルク＝ギュンター・フォルストナー男爵は, 1933年に証言したそうである[...]. その生き物は, 4つの脚と先のとがった頭, 長い尾を持つ約20メートルの大きさの海棲クロコダイルだった, と)

また, 繰り返しになるが, 今回調査したオンライン新聞の記事は, いずれもドイツの潜水艦と「海の怪物」に関するエピソードおよびスコットランドからのニュースに基づいて書かれているため, それらの情報が, 例14および例15のように接続法を用いた主文のかたちで引用される頻度が高く, その結果, 単一文が少なくなった可能性もある。たとえば, 例16では, 海洋考古学者のコメントが一貫して接続法で引用されている。「海の怪物」の目撃者自身が書き手であるKIや(例17), 直接引用が比較的多いBWに単一文が多いことは(例18), その傍証といえるだろう。

- 16) Bis der Werftstempel am Wrack gefunden werde, könne man zwar noch nichts Endgültiges sagen, so der

Archäologe weiter. Aber womöglich zeichne sich eine Lösung des Rätsels um UB-85 ab. (SZ 残骸についている造船所の標識が見つからないかぎりは, 決定的なことはなにも言えないが, と考古学者は続ける。しかし, 場合によっては, UB85をめぐる謎の答えがみえてくる, と)

- 17) Der lange Dampfer sank schnell. Beim Untergang erfolgte unter Wasser eine Detonation. Mit der Explosionswolke wurde ein etwa 20 Meter langes unbekanntes Seetier 20 bis 30 Meter hoch in die Luft geschleudert. (KI その長大な汽船は轟沈した。沈没時に水中で爆発がおきた。水柱とともに, 約20メートルの未知の海生動物が, 20から30メートルの高さまでふき飛ばされた)
- 18) Am 16. November beantwortete Ralf Brauksiepe, Parlamentarischer Staatssekretär bei der Bundesministerin der Verteidigung, für die Bundesregierung die Anfrage von Tobias Lindner. In seinem Schreiben heißt es: „[Zitat]“ [...] Weiter erklärt der Staatssekretär: „[Zitat]“ Das ist beruhigend... (BW 11月16日, ラルフ・ブラウクジーペ国防省政務次官が, 連邦政府にたいしトビアス・リンドナーの質問に回答した。彼の文書にはこうある。「[引用]」[...] さらに次官は説明する。「[引用]」それなら安心できる……)

3. 3. 自立的な基礎文と従属的な基礎文

話しことばでは, なるべく従属的な基礎文の使用を控え, 複雑な文構造になることを避ける傾向がみられる²³⁾。こうした傾向を明らかにするために, 付結文(主文と副文から構成される文)の使用頻度を調査する方法もあるが, その

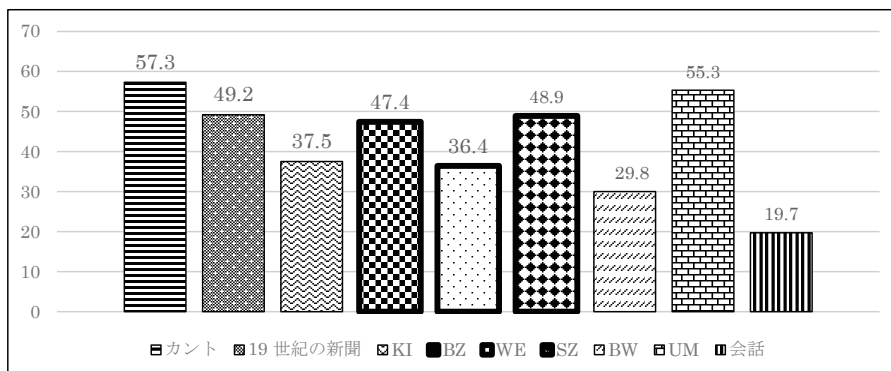
場合、付結文自体の複雑さが結果に反映されないことになる。たとえば、副文がひとつしかない例19と副文がみつがある例20との複雑さの違いが、考慮されないのである。

- 19) Das Unternehmen zitiert einen Experten, der anhand der Form auf das besagte deutsche U-Boot schließt. (WE この企業は、形状に基づいて前述のドイツの潜水艦であると考えている専門家のことばを引用している)
- 20) Die typische mit einem Fragezeichen versehene Schlagzeile einer reich bebilderten Tageszeitung, die die Versenkung von UB 85 möglicherweise dem Seeungeheuer zurechnet, obwohl dies selbst der Legende nach nicht der Fall gewesen sei, zeigt zudem, wie sich Legenden bei der Weitergabe auch verändert werden können. (UM それに加えて、伝説ですら否定しているにもかかわらず、UB85を沈めたのは海の怪物かもしれないとする、この典型的な大量のイラストと疑問符つきの大見出しを備えた日刊紙は、再話されるさいに伝説が変わってしまう可能性もあることを示している)

そのため、Ágel/Hennig (2006) は、文タイプではなく自立的な基礎文と従属的な基礎文の比率を調査することを提案している。本論では、従属的な基礎文がすべての基礎文に占める割合を算出した。その結果が表5である。「カント」および「会話」は、Ágel/Hennig (2006) において書きことばと話しことばの一例としてあげられた、カントの『プロレゴメナ』(1783) および現代の会話文の数値を示している。

すでに文の長さとの関係から述べたとおり、オンライン新聞には複数の従属的な基礎文を含む文は少なく、そのなかでも例21のように従属的な基礎文をみつ以上含む文はSZに2例あるだけである。しかし、基礎文全体からみると、従属的な基礎文が占める割合はとても多いことが明らかになった。WEのみ3分の1強と比較的少ないが、大衆紙であるBZも高級紙であるSZも半分近く、19世紀の新聞とほぼ同様の割合である。これは、おそらく単一文との関連で述べたように、BZもSZも「海の怪物」に関するエピソードやスコットランドからのニュースを接続法で述べているためだろう。その一方で、WEはこうした情報を直接法で表しているため、従属的な基礎文が比較的少ないのである(例22)。同様に直接法で記述しているBWも(例23)、他のテキストに基づかず目撃者自身によって書かれたKIも(例24)、従属的な基礎文が比較的少ない。この観点からは、従属的な基礎文の使用頻度ひいては文構造の複雑さは、オ

表5 従属的な基礎文の割合 (%) ²⁴⁾



オンライン新聞であるか否かや新聞のジャンルではなく、書き手が先行するテキストをどのように本文にとりこむかに依存している、としかいえない。

- 21) Es könne sich dabei um UB-85 handeln, das unter mysteriösen Umständen – zumindest, wenn man dem Kapitän glaubt – am 30. April 1918 gesunken war. (SZ さらに, それは——少なくとも, 艦長を信じるならば——1918年4月30日に沈んだUB85なのかもしれない, と)
- 22) Am 30. April 1918, mitten in der Nacht, tauchte das deutsche U-Boot SM UB-85 vor der britischen Küste an die Wasseroberfläche. Plötzlich begann das Wasser zu schäumen. Die Crew sah nach und entdeckte ein Seeungeheuer, welches ihr Boot angriff. So schilderte Kapitänleutnant Günther Krech die Nacht im Ersten Weltkrieg und beschrieb auch das Tier aus der Tiefe. (WE 1918年4月30日夜, ドイツの潜水艦SM UB85はイギリスの沖合で海面に浮上した。突如, 水が泡立ちはじめた。クルーが調べ, 艦に襲いかかる海の怪物を発見した。海軍大尉ギュンター・クレヒは, 第一次世界大戦中のその夜をこのように語り, 海中から現れた生き物についても描写した)
- 23) Denn „UB-85“ hatte nach dem Angriff des Ungeheuers, so schilderte es der Kommandant, nicht mehr abtauchen können und musste beschädigt aufgegeben werden. (BW なぜなら, 「UB85」は怪物の攻撃によってもはや潜航できなくなっており, 損傷したまま放棄しなければならなかったからである, 艦長はそう述べた)

- 24) Ich fuhr sofort mit hoher Fahrt zu der Stelle hin, das Tier blieb aber in der Tiefe verborgen. – Der Oberkörper war dunkel, bräunlich-grau, der Bauch heller. Der auf einem langen Hals sitzende Kopf verlief spitz nach vorn. Besonders fielen mir die großen, viereckig scharfen Panzerschuppen auf dem Rücken des Tieres auf. (KI 私は高速でその場にむかったが, その生き物は海中に隠れたままだった。——背中では暗い茶色がかった灰色で, 腹はより明るい色。長い頸の先にある頭は, 先端にむかって細くなっていた。私にとってとりわけ印象的だったのは, その生き物の背中の四角くとがった大きな鱗である)

3. 4. 「文接続の線状性」

話しことばの特徴のひとつとして, 複雑な構造である箱入り文(Schachtelsatz)を避ける傾向があげられる。箱入り文は基礎文のなかに別の基礎文が挿入されている文であり, たとえば, 以下の2例では主文のなかに副文(下線部)が挿入されている。この点に関して, Ágel/Hennig (2006)は, あるテキストにおいて基礎文がほかの基礎文によって中断される頻度(「文接続の線状性」)を算出することで, テキストの話しことば性を数値化する方法を提案している。この数値が大きければ大きいほど基礎文の中断は少なく, 線状で理解しやすい話しことば的なテキストとみなせる²⁵⁾。

- 25) Der britische Archäologe Innes McCartney, der bei der Identifizierung des Wracks geholfen hat, will die Version des deutschen Kapitäns nicht so recht glauben. (SZ その残骸の確認に協力したイギリスの考古学者イネス・マッカートニーは, ドイツ人艦長の見解をそれほど信じる

つもりはない)

- 26) Auf seiner zweiten Feindfahrt unter seinem Kommandanten Kptlt. Günther Krech wurde UB 85 nach Aussagen von Überlebenden der Besatzung, die dem U-Boot-Archiv vorliegen, am 30.04.1918 im nördlichen Firth of Clyde nach einer Tauchpanne aufgegeben und versenkt. (UM 海軍大尉ギュンター・クレヒの指揮下で2回目の作戦行動中だったUB85は、潜水艦公文書館にある生き残った乗組員の証言によれば、1918年4月30日にクライド湾北部で潜水装置の故障後に放棄され、沈められた)

「文接続の線状性」の数値を表6に示した。新聞においては、一般的に、箱入り文が避けられる傾向が指摘されてきたが、今回の調査対象においても、BZには1例しかなく(例8)、WEにいたっては基礎文の中断が皆無だったため数値化できていない。その一方で、SZには4例みられ(例25)、これまでの観点からはもっとも複雑な文構造をしていると思われたUMよりも数値が小さい。高級紙であるSZの記者が箱入り文に親しんでいたから、と考えることもできるかもしれないが、いずれにせよ4例だけなので、有意な差とはいえないだろう。なお、もっとも頻繁に従属的な基礎文を用いていたUMではサンプル中最多の6例あるが(例26)、SZの4例

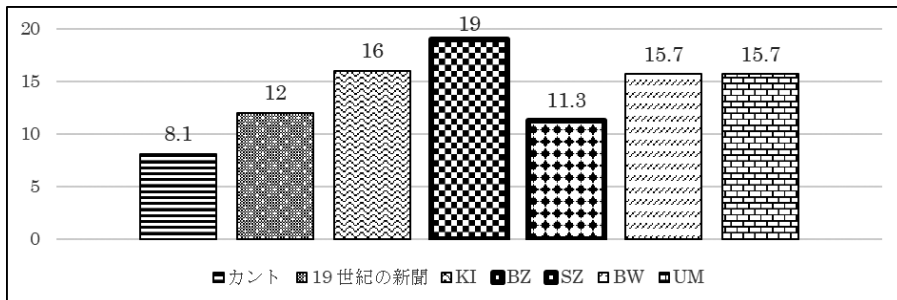
も含め、一文中に複数の中断がみられることはなく、読解が困難と思われるような構造はみられなかった。

IV 展望

調査で明らかになったのは、以下の点である。まず、オンライン新聞の言語には(おそらくは「スキミング」に適した文を目指したために)一般的に短文化の傾向がみられ、大衆紙も高級紙もともに話しことば性が高いといえる。ただし、先行するテキストを要約したさいには、情報が詰め込まれた長文も用いられる。文構造の複雑さに関しては、オンライン新聞の特性や想定読者層ではなく報道の仕方に依存している面が大きく、直接引用を多用した記事は並列的で話しことば性が高く、接続法を用いた引用が多い記事は従属的で話しことば性が低いという結果になった。また、文相当句はどのサンプルにもほぼ用いられておらず、唯一の例は、一文における基礎文の数を抑えようとする話しことば的な用例とみなせる。「文接続の線状性」に関して、用例が少ないため確定的なことはいえないが、この数値が比較的低く、したがって話しことば性が低いとみなせるのは高級紙のSZであることが指摘できる。

今回はあくまでパイロット調査であり、それぞれのサンプルがひとつの記事からなりたっていたため、とくに基礎文に関する考察にさいしてはその弊害がみられた。しかし、コーパスが大きくなれば複数の執筆者による多様な報道が

表6 「文接続の線状性」²⁶⁾



含まれるため、このような偏りは解消されることだろう。この調査結果を踏まえたいうえで、大規模コーパスの分析に取り組みたい。

注

- 1) すでに2008年時点で、日刊の全国紙を読む20歳以下の割合はたったの4%しかなかった。なお、その一方で、特定の趣味をもつ読者層を対象にした専門紙には、影響は比較的少なかったことが指摘されている。Vgl. Bucher 2006: 210; Fischer 2007: 9, 13; Uhrich 2015: 32f.
- 2) Vgl. Bucher 2006: 215, 228.
- 3) Vgl. Uhrich 2015: 57f.; 細川2018: 86, 88.
- 4) Vgl. Bucher 2006: 213f., 229.
- 5) 両図版の情報は一次資料としてあげている。なお、オンライン新聞の記事は2021年12月13日に保存したデータに基づいて調査しているが、BZの図版に関してのみ2022年6月30日に保存した画面である。
- 6) BZの他の記事には、「こちらもお読みください (Lesen Sie auch)」という別の記事へのリンク欄もあり、同様に本文を中断している。
- 7) Vgl. Zürn 2000: 322, 324; Bucher 2006: 210f.; Fischer 2007: 9.
- 8) Bucher (1999) はインターネットを時間的・空間的制約のない「ヴァーチャルなもの」という意味で「ヴァーチャル性」とまとめているが、意味がつかみにくいように思われたので、「時局性」と「ユビキタス性」とに分けた。Bucher 1999: 9f.; Bucher 2006: 215.
- 9) Vgl. Storrer 2001: 175f.
- 10) Vgl. Storrer 2001: 181ff.; Auer 2002: 131; Bucher 2006: 215; Fischer 2007: 14ff., 21.
- 11) Vgl. Uhrich 2015: 53f.
- 12) オンライン新聞では、トップページに記事のタイトルとリード文が配置され、そこから記事本文にリンクが貼ってあることが多い。そのため、このリード文は、記事を選択する読者にとってきわめて重要なテキストであるが、本論では、このように記事とリード文が個別に配置されることのない他の媒体とも比較するため、記事の本文のみを調査対象とした。また、直接引用文を含まないのは、それが新聞記者のことばではないからである。
- 13) Vgl. Admoni 1987: 23; Uhrich 2015: 180f.
- 14) 新聞名横の数字は調査対象の刊行年、現代の新聞で[*]印がついているものは紙媒体(および紙媒体の新聞をデジタル化したもの)であることを示している。Vgl. Pfeil 1977: 251; Fischer 2007: 56;

Hosokawa 2014: 150; Uhrich 2015: 180.

- 15) Eggers (1973) では、その他のカテゴリーは「9語~28語」、「29語~48語」、「49語以上」となっている。Vgl. Eggers 1973: 36; Fischer 2007: 55.
- 16) Vgl. Eggers 1973: 36; Hosokawa 2014: 146.
- 17) Vgl. Admoni 1990: 194; Hosokawa 2014: 139f.
- 18) WEにおける最長の文は21語を含む文で、2例あるが、ここでは基礎文の数が多い方をあげている。
- 19) Vgl. Ágel/Hennig 2006: 64.
- 20) 文相当句は、19世紀の新聞では文全体の1.8%、1960年代のFAZでは3%、BZでは13.6%を占めていた。Vgl. Mittelberg 1967: 184; Eggers 1973: 43; Hosokawa 2014: 162.
- 21) Vgl. Mittelberg 1967: 184f.
- 22) Vgl. Mittelberg 1967: 184; Eggers 1973: 43; Hosokawa 2014: 174.
- 23) Vgl. Auer 2002: 132.
- 24) Vgl. Ágel/Hennig 2006: 65, 67; Hosokawa 2014: 185.
- 25) Vgl. Auer 2002: 135ff.; Ágel/Hennig 2006: 65, 68.
- 26) 数値がとびぬけているのでグラフには示さなかったが、「会話」の「文接続の線状性」は114である。Vgl. Ágel/Hennig 2006: 65, 68; Hosokawa 2014: 186.

一次資料

- Kölnische Illustrierte Zeitung*: Ein deutscher U-Boot-Kommandant sah schon 1915 das Ungeheuer. Der sensationelle Bericht des Korvettenkapitäns Frhrn. v. Forstner. (10.2.1934, S. 152)
- Bild*: Kriegsschiff SM UB-85 vor Schottland entdeckt. Hat ein Seeungeheuer das deutsche U-Boot versenkt?: <https://www.bild.de/news/mystery-themen/u-boot/versenkte-ein-seeungeheuer-das-deutsche-kriegsschiff-48362892.bild.html> (13.12.2021, 30.6.2022)
- Bundeswehr-Journal*: Seemonster und Uboote: Was weiß die Bundesregierung?: <http://www.bundeswehr-journal.de/> (13.12.2021)
- Deutsches U-Boot-Museum*: U-Boot-Wrack aus dem 1. Weltkrieg im Nordkanal entdeckt: <http://dubm.de/oktober-5/> (13.12.2021)
- Die Welt*: Fund von deutschem U-Boot beflügelt Seemonster-Fantasien: <https://www.welt.de/geschichte/article158911472/Fund-von-deutschem-U-Boot-befluegelt-Seemonster-Fantasien.html> (13.12.2021)
- Süddeutsche Zeitung*: Legendenumwobenes Weltkriegs-U-Boot entdeckt: [無断転載禁止](https://www.sueddeutsche.de/panorama/erster-weltkrieg-deutsches-u-boot-nach-</p>
</div>
<div data-bbox=)

angeblicher-seemonster-attacke-wieder-aufgetaucht-1.3214070 (13.12.2021)

参考文献

細川裕史 (2018) : 「虚報が虚報を養う——大海蛇報道に関する覚書——」『阪南論集 人文・自然科学編』53 (2) 号, 83-90 頁。

Admoni, Wladimir (1987) : *Die Entwicklung des Satzbaus der deutschen Literatursprache im 19. und 20. Jahrhundert*. Berlin.

Admoni, Wladimir (1990) : *Historische Syntax des Deutschen*. Tübingen.

Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (2006) : Praxis des Nähe- und Distanzsprechens. In: Dies. (Hg.) : *Grammatik aus Nähe und Distanz. Theorie und Praxis am Beispiel von Nähertexten 1650-2000*. Tübingen. S. 33-74.

Auer, Peter (2002) : Schreiben in der Hypotaxe-Sprechen in der Parataxe? Kritische Bemerkungen zu einem Gemeinplatz. In: *Zeitschrift „Deutsch als Fremdsprache“* 39. Jahrgang, Heft 3, 2002, S. 131-138.

Bucher, Hans-Jürgen (1999) : Die Zeitung als Hypertext. Verstehensprobleme und Gestaltungsprinzipien für Online-Zeitungen. In: Henning Lobin (Hg.) : *Text im digitalen Medium. Linguistische Aspekte von Textdesign, Texttechnologie und Hypertext Engineering*. Wiesbaden. S. 9-32.

Bucher, Hans-Jürgen (2006) : Gedrucktes im Internet. Online-Zeitungen und Online-Magazine auf dem Weg zu einer eigenständigen Mediengattung. In: Peter Schlobinski (Hg.) : *Von *hdl* bis *cul8r**. Sprache und Kommunikation in den neuen Medien. Mannheim. S. 210-232.

Eggers, Hans (1973) : *Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. München.

Fischer, Annika (2007) : *Online-Journalismus. Wie Printartikel sich von Online-Artikeln unterscheiden. Eine quantitative und qualitative Untersuchung anhand überregionaler Zeitungen in Deutschland*. Norderstedt.

Fiehler, Reinhard/Barden, Birgit/Elstermann, Mechthild/Kraft, Barbara (2004) : *Eigenschaften gesprochener Sprache*. Tübingen.

Hosokawa, Hirofumi (2014) : *Zeitungssprache und Mündlichkeit. Soziopragmatische Untersuchungen Zur Sprache in Zeitungen um 1850*. Frankfurt a.M. u.a.

Koch, Peter/Oesterreicher, Wulf (1985) : Sprache

der Nähe - Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch* 36. S. 15-43.

Krüger, Christiane (1995) : *Journalistische Berichterstattung im Trend der Zeit: Stilstrategie und Textdesign des Nachrichtenmagazins FOCUS*. Münster.

Mittelberg, Ekkehart (1967) : *Wortschatz und Syntax der Bild-Zeitung*. Marburg.

Pfeil, Monika (1977) : *Zur sprachlichen Struktur des politischen Leitartikels in deutschen Tageszeitungen. Eine quantitative Untersuchung*. Göppingen.

Schwitalla, Johannes (2006) : *Gesprochenes Deutsch*. 3. Aufl. Berlin.

Storrer, Angelika (2001) : Schreiben, um besucht zu werden. Textgestaltung fürs World Wide Web. In: Hans-Jürgen Bucher/Ulrich Püschel (Hg.) : *Die Zeitung zwischen Print und Digitalisierung*. Wiesbaden. S. 173-205.

Uhrich, Daniela B. (2015) : *Die Auswirkungen der medialen Internetnutzung auf die Print-Zeitung. Eine medienlinguistische Analyse. Dissertation*. Julius-Maximilians-Universität. Würzburg.

Zürn, Matthias (2000) : Print- und Onlinezeitung im Vergleich. In: *Meida Perspektiven* 7. S. 319-325.

(2022年7月15日掲載決定)